熊本大学教育学部紀要、第六六号、四〇五―四一二、二〇一七

早稲田大学図書館蔵『梅花無尽蔵』について

――国書刊行会原稿を中心に――

中尾　健一郎

塙保己一（一七四六～一八二一）が享和三年（一八〇三）に『続群書類従目録』を作ってから目録所載の書物がすべて印刷される昭和四七年（一九七二）までに、百七十年もの歳月を要した。その歩みは既に先学の明らかにするところであり[1]、筆者が研究対象としている万里集九『梅花無尽蔵』について言えば、明治三五年（一九〇二）に経済雑誌社から初版が、昭和三四年（一九五九）に続群書類従完成会から訂正三版が刊行されて現在に至っている。

ところで、続群書類従完成会編『続群書類従』に収める『梅花無尽蔵』（活字本、以下、「続類従本」と略記）は、玉村竹二氏が「万里集九集解題」（『五山文学新集』第六冊、東京大学出版会、一九七二年。以下、「解題」と略記）に説いたように、底本の変更が行われており、変更後の底本も特定するには至っていない。明治時代には数種の『梅花無尽蔵』が書写されているが、その中の一つに早稲田大学図書館所蔵の『梅花無尽蔵』六巻三冊がある。筆者は、これが続類従本の底本と関係するのではないかと考え、近年調査を行った。結論から言えば、この本は国書刊行会が出版する可能性があった原稿であり、且つ『続群書類従』の底本として選択されなかった写本である。また、「解題」にふれられておらず、その由来は不明であるものの、活字本の『続群書類従』のシリーズに加えられる可能性を持っていた貴重なものである。

そこで本稿では、この六巻三冊本の内容と構成、この本の系統と特徴、その成立の背景を、可能な限り明らかにすることを目的とする。なお早稲田大学図書館には、もう一部『梅花無尽蔵』三巻三冊の写本が収蔵されているので、これについても併せて取り上げる。『梅花無尽蔵』所収作品については、特に断らない場合は、東京大学史料編纂所蔵『梅花無尽蔵』（平戸藩松浦家旧蔵、以下、「東大本」と略記）を底本とし、基本的に通行の字体を使用する。また作品題目には、巻数と市木武雄『梅花無尽蔵注釈』[2]の作品番号を附す。

一　早稲田大学所蔵『梅花無尽蔵』二種の書誌

早稲田大学図書館には二種類の『梅花無尽蔵』が収蔵されている。一つは旧蔵者不明の六巻三冊本（以下、「早大本」と称する）、もう一つは黒川真頼・真道旧蔵の七巻三冊本（以下、「黒川本」と称する）である。前者は「国書刊行会原稿」とされている。後者は宮内庁書陵部蔵『梅花無尽蔵』と同内容の抄録本であり、各巻の全作品が連続して収められているわけではない。次に早大本と黒川本の書誌を挙げよう。

早大本

書目番号：へ　一六　一〇四七　一～三

【数量】六巻三冊

【書型】半紙本　縦二三・四糎、横一五・六糎

【体裁】毎半葉一〇行、行二〇字

【表紙】薄茶色、紋様：横刷毛目

【外題】左肩に題簽打付、墨色「梅花無尽蔵　一二」

【内題】「梅花無尽蔵第一」

【著者】周九（ママ）（早稲田大学図書館の図書カードによる）

【印記】第一冊・第二冊・第三冊の各巻頭に「早稲田大学図書」の朱方印、「明治卅九年十月一日購求」の朱丸印

【備考①】第一冊は巻一・巻二、第二冊は巻三上・下、第三冊は巻四・巻五・巻六。第二冊中表紙に「松井写／百十二枚」、第三冊第五〇丁表に、「中止ノ命ニ接し完了セス　松井写／弐十五枚／梅花無尽蔵　六」の墨書による記述あり。巻五所収作品については、「長庚之通記室扣余寂～」（巻五・15）の「室為僧中之烏鉢曇花」以下を欠く。第三冊第五一丁表の「答大昌天隠和尚詩序」（巻六・1）より第七五丁表「静勝軒銘詩並序」（巻六・28）の末尾に至るまで、『梅花無尽蔵』巻六所収の二八篇の文を収録。松井氏の名は未詳。

【備考②】早稲田大学図書館の図書カードに、「国書刊行会原稿」の記述あ

り。『早稲田大学図書館史』（早稲田大学図書館、一九九〇年、二一頁・二四四頁）によれば、明治四一年（一九〇八）に、国書刊行会より『国書刊行会叢書』の草稿本・校正本が寄贈されているが、早大本はこれに先んじて明治三九年（一九〇六）に購入されている。

黒川本

書目番号：へ　一六　三三三三三　一～三

【数量】七巻三冊

【書型】大本　縦二六・五糎、横一八・五糎

【体裁】毎半葉一三行、行二〇字

【表紙】丹色、紋様：無地。

【外題】左肩に題僉打付、墨色「梅花無尽蔵　上」、右上に「万里和尚」と朱書

【内題】「梅花無尽蔵第一」

【著者】集九（早稲田大学図書館の図書カードによる）

【印記】各冊の表紙に、「詩文」の朱円印。巻頭に「黒川真頼蔵書」「黒川真道蔵書」「福田文庫」の朱方印。「黒川真頼」「待賈堂」の朱円印。「早稲田大学図書」の朱方印。下冊の巻末に「福田文庫」の朱方印。少し凝った枠で「江戸四日市／古今珍書僧／達磨屋五一」の朱印。国文学研究資料館ホームページ、「蔵書印データベース」[3]の「待賈堂」の項によれば、「待賈堂」「珍書僧」「達磨屋」は、幕末の書賈岩本五一の堂号。

【奥書】「文久三年癸亥四月廿日収得之　福田松蔭」

【備考】上冊は巻一・巻二、中冊は巻三上・下、下冊は巻四・巻五・巻六・巻七に相当。抄出する作品の内容は、宮内庁書陵部蔵『梅花無尽蔵』と同じである。ただし下冊全四三丁のうち、第四〇丁と第四一丁が乱丁。この二丁の順序が前後している。奥書の文久三年は一八六三年。早稲田大学図書館の図書カードに、「黒川家旧蔵」「昭和41・2・12購寄」の記録あり。

一〇

論述上の都合により、早大本の特徴等については次節に述べることにして、本節では黒川本の由来と、この本と他の『梅花無尽蔵』抄録本の関係についてふれたい。旧蔵者の黒川真頼（一八二九～一九〇六）は、塙保己一の門人黒川春村の養子であり、『古事類苑』の編纂者。真道（一八六六～一九二五）はその子である。印記を時系列で見れば、岩本五一、福田松蔭、黒川真頼・真道父子の順に所蔵者が替わり、昭和四一年（一九六六）に早稲田大学図書館に購入されたと考えられる。ちなみに「解題」によれば、福田松蔭は静嘉堂文庫蔵『梅花無尽蔵』二冊本を明治二四年（一八九一）以降に所有した旧蔵者であり、印記の「福田文庫」は、この人の印である（「解題」一一八〇頁）。なお、達磨屋岩本五一（一八一七～一八六八）が江戸の書籍商であったことに鑑みれば、達磨屋は福田松蔭に『梅花無尽蔵』を売り、その後、黒川真頼がこれを入手したのかもしれない。真頼から受け継がれた真道の蔵書は、真道の子真前の代に一部が筒井久太郎の所有となり、それがやがて実践女子大学に収蔵された。その餘は戦後に古書肆一誠堂に一括購入された後、明治大学、國學院大学、日本大学、東京大学などの所有となった[4]。黒川本については、柴田光彦氏の労作『黒川文庫目録　本文編』「書籍目録廿一　詩文」の部に「梅花無尽蔵〈万里和尚〉［写］」（三冊）とあり[5]、一誠堂が一括購入したものの一つであったことがわかる。それを昭和四一年に早稲田大学図書館が購入したと見られる。

黒川本が『梅花無尽蔵』七巻の抄録本であることは前にふれたが、筆者が現在確認しているところで、宮内庁書陵部蔵本（明治政府宮内省への献納書）と国会図書館鶚軒文庫蔵一冊本（この二種は「解題」に取り上げられている）、および国立公文書館内閣文庫所蔵の『続群書類従』写本『梅花無尽蔵』（明治政府教部省への献納書）、静嘉堂文庫蔵『続群書類従』写本『梅花無尽蔵』（明治政府内務省への献納書の稿本）[6]は、黒川本と同じ内容である。また宮内庁本と内閣文庫本および静嘉堂文庫本が毎半葉一〇行、行二〇字の体裁を採り、鶚軒文庫一冊本が毎半葉一三行、行一八字の体裁を採るのに対して、黒川本は毎半葉一三行、行二〇字の体裁である。このような点から見て黒川本は、収録作品は宮内庁本・内閣文庫本・静嘉堂文庫本といった『続群書類従』の抄録本（中書本）、および鶚軒文庫一冊本と同一であるが、体裁上、これらと直接の関係はないものと見られる。黒川本は『梅花無尽蔵』七巻の全体から抜き書きした抄録本であり、これと同内容の『梅花無尽蔵』抄本はおそらく他にも存在す

ると見られるが、その親本的地位を占めるのが何であるかは未詳である。ただ一行あたりの字数を同じくする黒川本と『続群書類従』系の抄録本は、行数こそ異なるものの、近い系統のテキストであると言えるのではないか。考を待つ。

二　早大本と榊原芳野旧蔵本・鶚軒文庫旧蔵本の関係について

早稲田大学図書館には、黒川本よりも新しい六巻三冊の写本が収蔵されており、前節の書誌に記したように「国書刊行会原稿」とされている。本稿冒頭に述べたように、これを「早大本」と称することにして、本節では以下、この写本の有する特徴と系統について論じよう。

早大本においては通行する『梅花無尽蔵』全七巻のうち、第一巻から第四巻まではすべての作品を収めているが、第五巻と第六巻については作品の収録が不完全であり、第七巻の作品は全く含まない。『梅花無尽蔵』の系統を調査する際には、「解題」において行われているように、巻七所収の「囲碁軸賛詩序」（巻七・9）の「須臾風雨」に続く部分が脱落しているものを続群書類従活字本（「続類従本」）、脱落せずに「前住禅興竺帝和尚祭文」（巻七・43）で終わっているものを東京大学史料編纂所蔵七巻八冊本[7]の系統と見なしている。その他、筆者が前稿「肥前島原松平文庫蔵『梅花無尽蔵抜書』について」（『熊本大学教育学部紀要』第六五号、二〇一六年）に述べたように、名古屋市蓬左文庫蔵『梅花無尽蔵』七巻六冊（以下、「蓬左本」と略記）がある。これは続類従本に近い内容だが、巻次等の系統を異にし、尾張徳川家が所有した江戸中期の写本であって由来も古い。

早大本がいかなる親本に基づいて筆写されたかは不明であるが、諸々の特徴から見て、系統で言えば巻七所収の全作品を収める東大本と同類であり、同じく巻七に作品の脱落が見られない土井鶚軒旧蔵七巻七冊本（国立国会図書館鶚軒文庫蔵、以下、「鶚軒本」と略記）と榊原芳野旧蔵七巻四冊本[8]（国立国会図書館蔵、以下、「榊原本」と略記）の二種のうち、榊原本にもっとも近いと考えられる。参考までに、「解題」から榊原本の書誌を一部引用しよう。

巻一・巻二を第一冊に、巻三上下を第二冊に、巻四・五を第三冊に、巻六・七を第四冊に収めている。（中略）本文は第一冊のみは毎半葉八行、行十五字で、七言絶句詩は、句の間を一字あけて二句づつ一行に、四句合せて二行に整へて記されてゐる。朱點・朱印なく、返點・送假名がある。第二冊は毎半葉八行、行十七字で、この冊も七言絶句を收めてはあるが、記録法は第一冊と異り、延べ書に二行に亙つて記されてゐる。朱引あり、返點・送假名がある。第三冊は毎半葉八行、行十七字、朱引あり、返點・送假名がある。第四冊は、毎半葉八行、行十七字で、朱引あり、返點・送假名はない。料紙は薄い雁皮紙であり、註記は夾註になつてゐる。各冊共に卷頭に「東京圖書館藏」「故榊原芳埜納本」「莞齋藏」「靜勝文庫」「榊原家藏」の朱印が捺押されてゐる。依つてこの本は幕末から明治初年にかけて活躍した國學者にして藏書家で且つ考證家であつた榊原芳野の舊藏本で、明治十四年、芳野の卒去後に、國會圖書館の前身たる東京圖書館に寄贈になつたものである。この本にも勿論卷七の後半が完備して居り、善本であるが、書寫年代は史料編纂所本よりも新しい。原寸、縦二六・九糎、横一八・八糎。

筆者は先に早大本は榊原本にもっとも近いと述べたが、この見解は次の四点を総合して考察し、その結果得られたものである。

㊀　早大本には、第一冊所収「画軸二首」（巻二・121、巻二・122）の上段に「有脱簡許多」と注記があり、実際に「画軸二首」の詩本文と、続く「文琳氏赤井～」（巻二・123）および「送起雲丈人並叙」（巻二・124）の詩題と詩序冒頭の二八字が脱落して「色文明乙巳之冬」から始まっている。一方、榊原本の「画軸二首」の上段にも「有脱簡許多」の注記があり、早大本と同じ箇所が脱落している。「解題」に述べられている榊原本の巻二の体裁であれば、一丁分が失われていると見られる。なお鶚軒本については巻二が失われているため比較できない。東大本には脱落なし。

㊁　早大本第三冊所収「読円悟禅師梅花詩」（巻四・52）の詩題と本文の間に、「大安蔵春翁～」（巻四・55）の本文から「遊江戸城菅丞相祠堂」（巻四・64）に至るまでの十篇、榊原本の体裁で二丁分の作品が竄入している。これは榊原本と鶚軒本、および東大本にも共通する乱丁である。

㊂　鶚軒本には特有の乱丁がある。「便面」（巻三下・135）と「画軸」（巻三

下・136、詩題は脱落）の本文の間に、「琦公少年和」（巻三下・140）の本文から「次韻釣雪舟鴻門灯籠之偈～」（巻三下・148）の詩題までの二丁分が竄入している。榊原本は「画軸」の詩題が脱落しているが、この部分に乱丁は見られない。早大本は「画軸」の詩題を備え、やはり榊原本と同様にこの部分に乱丁は見られない。東大本も早大本と同様。

四　鶚軒本では「猫児双蝶図」（巻三上・187）が脱落しており、後人によって「便面」（巻三上・189）の後に補筆されている。早大本と榊原本、および東大本においては、この詩の脱落・補筆は見られない。

以上が、早大本が榊原本に近いと考える理由である。要するに詩文の脱落・乱丁の箇所を調べれば、早大本・榊原本・鶚軒本にそれぞれ散見し、早大本と榊原本に一致する点がもっとも多く見られるということである。

次に本文異同の方面において、早大本・榊原本・鶚軒本が一群を成すことを裏付けておこう。その顕著なものを挙げれば、左記のようであるが、参考までに東大本と蓬左本の例も併記し、異同のある文字はゴシック体で表記する。なお今回、続類従本の例を挙げないのは、同書は蓬左本に近い系統であり、基本的に大部分がこれと一致するからである。

①「二日透過梭師之梯登三国之嶽遂作二詩」其一（巻三上・11）第二句

東大本　「石**捧**剣**鋩**穿脚頭」
鶚軒本　「石**棒**剣（捧）（鋩平）（釭イ）穿脚頭」
榊原本　「石**捧**剣（本ノマヽ）（金並）穿脚頭」
早大本　「石**捧**剣（本ノマヽ）（金並）穿脚頭」
蓬左本　「石**捧**剣**鋩**穿脚頭」

②「十九日同行～」（巻三上・54）詩題

東大本　「十九日**同**行愚**菴**等堅首座赴長安。余因風**雷**欲留滞。
　故投三書於**祇梅**和尚并尾州守対馬守倩湖子為使**星**云」
鶚軒本　「十九日**同**行愚**菴**等堅首座赴長安。余因風**雷**欲留滞。
　故投三書於**祇梅**和尚并尾州守対馬守倩湖子為使**屋**（星）云」
榊原本　「十九日**同**行愚**菴**等堅首座赴長安。余因風**雷**欲留滞。
　故投三書於**祇梅**和尚并尾州守対馬守倩湖子為使**星**云」

早大本　「十九日**仝**行愚**庵**等堅首座赴長安。余因風**雷**欲留滞。
　故投三書於**祇梅**和尚并尾州守対馬守倩湖子為使**星**（星）云」
蓬左本　「十九日**同**行愚**菴**等堅首座赴長安。余因風**雪**欲留滞。
　故投三書於**祇海**和尚并尾州守対馬守倩湖子為使**呈**云」

③「三月十又一日己巳、詣能生山～」（巻三上・111）第一句と第三句

東大本　「白山霊廟幾**径**（経）年」「早晩俶装**歌**（欲平）解纜」
鶚軒本　「白山霊廟幾**経**年」「早晩俶装**欲**解纜」
榊原本　「白山霊廟幾**経**年」「早晩俶装**欲**解纜」
早大本　「白山霊廟幾**経**年」「早晩俶装**欲**解纜」
蓬左本　「白山霊廟幾**経**年」「早晩俶装**歌**解纜」

④「吹和甫少年韻、祝登科云」（巻三上・192）詩題

東大本　「**吹**（次平）和甫少年韻、祝登科云」
鶚軒本　「**吹**（次平）和甫少年韻、祝登科云」
榊原本　「**吹**（次平）和甫少年韻、祝登科云」
早大本　「**次**和甫少年韻、祝登科云」
蓬左本　「**次**和甫少年韻、祝登科云」

⑤「聖徳太子画像賛」（巻三上・258）第一句

東大本　「鑿開仏法最初**夘**（恐節平）」
鶚軒本　「鑿開仏法最初**夘**（恐節平）」
榊原本　「鑿開仏法最初**夘**（恐節平）」
早大本　「鑿開仏法最初**師**」
蓬左本　「鑿開仏法最初**夘**」

⑥「画軸」二首其一（巻三上・301）

東大本　「蕭字招提万仞西　暮橋臥処浪痕迷　看松二老吟敲**膝**
　先鍊詩邪先鍊**題**」
鶚軒本　「蕭字（寺ヂ字）招提万仞西　暮橋臥処浪痕迷　看松二老吟敲**膝**
　先鍊詩邪先鍊**頭**（題）」
榊原本　「蕭字招提万仞西　暮橋臥処浪痕迷　看松二老吟敲**膝**
　先鍊詩邪先鍊**頭**」
早大本　「蕭字招提万仞西　暮橋臥処浪痕迷　看松二老吟敲**枕**（膝）
　先鍊詩邪先鍊**頭**」

蓬左本　「蕭字招提万仞西　暮橋臥処浪痕迷　看松二老吟敲**膝**
　先錬詩邪先錬**題**」
⑦「持是院屏風十二首」其六（巻三下・32）
東大本　「細路分**又**野彴低　唐餘纔置古招提　旧時礼楽無増損
　暮照□［粘］鯨数杵**遠**」迷乎
鶚軒本　「細路分**又**（又乎）野彴低　唐餘纔置古招提　旧時礼楽無増損
　暮照□［粘］鯨数杵**遠**」迷乎
榊原本　「細路分**又**野彴低　唐餘纔置古招提　旧時礼楽無増損
　暮照□［粘］鯨数杵**遠**」迷乎
早大本　「細路分**又**野彴低　唐餘纔置古招提　旧時礼楽無増損
　暮照**粘**鯨数杵**迷**」
蓬左本　「細路分**叉**野彴低　唐餘纔置古招提　旧時礼楽無増損
　暮照**粘**鯨数杵**遠**（迷乎）」

①から⑦の本文の傍に書き付けてあるのは、校訂者（鶚軒本の校訂者が矢部潤である他は未詳）による校語、⑦の詩に見える「□」は一字分の脱落、「［粘］」は脱落箇所の傍に「粘」と補筆されていることを表す。

早大本と鶚軒本・榊原本は、同じく東大本系統と目されるが、特に①③⑥の例を見れば、同じ東大本系統でも鶚軒本・榊原本・早大本が一つのグループを構成していることがわかる。④の詩題冒頭においては、「吹」字を早大本と蓬左本では「次」字に作るが、これが次韻詩であることを考えれば、「次」字が正しい。⑤の例に見える早大本の「師」字は、これのみが詩句の意味を成立させる。なお他本に「師」字は見えないが、「師」は韻字（他の韻字は「儀」と「髭」）であるため、校訂者が底本の字を書き換えたと見られる。⑦の例に見える結句の「迷」字も韻字であるので同様である。②の例の「仝」字と⑥の例の「枕」字は、早大本固有の異同であり、またここには挙例していないが、「代京子」（巻三上・100）の詩題の「子」字も早大本のみが欠いている。これらの異同が見られることから、早大本の親本が榊原本ということはない。紙幅の都合により、多くの異同例を挙げられないが、以上から早大本が東大本に近いながらも、榊原本・鶚軒本により近く、且つ東大本とはやや異なる系統であることが分かる。

ちなみに鶚軒本には「太田氏図書」の印記があり、玉村竹二氏は「解題」に、これを水戸藩太田氏（遠祖は太田道灌）のものと推測している。そうであれば鶚軒本と「静勝文庫」の蔵書印[9]を持つ榊原本は、静勝公太田道灌ゆかりの太田氏所蔵のテキストに由来することになる[10]。この両本は体裁も一致しており（「解題」を参照）、両本の錯簡箇所が部分的に一致していることも併せて考えれば、実に傾聴すべき見解である。

三　早大本成立の背景

「国書刊行会原稿」と見なされてきた早大本は、第一節の書誌に紹介したように、第三冊の第五〇丁表に、「中止ノ命ニ接し完了セス　松井写　弐十五枚」の墨書がある。また巻五の詩と巻六の文は揃わず、巻七に至っては全文が省略されている。つまり筆写自体が何らかの事情により中断の憂き目を見たのである。本節では、早大本が国書刊行会の原稿に選ばれながら、未刊に終わったのは何故か、またそれはいつ頃のことなのか、その一部を書き写した「松井」氏とは誰なのかについて論じたい。

早稲田大学図書館には、「国書刊行会叢書草稿」と名付けられた一群の資料が収められている。これらは『早稲田大学図書館史』（既出）によれば、明治三八年（一九〇五）に当時の図書館長であった市島謙吉（号は春城）らが中心となって国書刊行会を設立し、『国書刊行会叢書』第一期を刊行した後に寄贈された草稿本や校正本であり、『早稲田大学図書館史』には、寄贈された時期は明治四一年（一九〇八）四月とされている[11]。それでは早大本はその折りに『国書刊行会叢書』の一つとして収蔵されたのかといえばそうではない。何故なら、国書刊行会が刊行した『続々群書類従』や『新群書類従』に『梅花無尽蔵』は含まれておらず、また早大本は明治三九年（一九〇六）に何処からか別に購入されたものだからである。早大本は未完成の写本であり、またそれゆえに刊行もされていないのであるが、「国書刊行会原稿」と記録されているのは何故か。その事情は、市島春城が著した『国書刊行会出版目録・日本古刻書史』所収「第一期刊行顛末」（以下、「顛末」と略記）の「劈頭の問題」から窺い知ることができる。

會の成立後眞先きに大隈總裁邸に開いた評議員會には、席上種々の説が起つた。第一に問題となつたのは會の名稱である。原案は國書保存會とあつた、保存の二字は消極的に聞えて妙でないといふ所から、重野會長の説により現在の名稱に定めた。次ぎの問題は刊行圖書の選定である。先づ塙檢校の續群書類從を刊行するが急務でないかといふ説もあつたが、是れは兎も角も經濟雜誌社に於て出版着手中だといふ理由から敗れて、遂に塙の後を承け新に續々群書類從二十册を編纂する事となつた。併し時代の古い硬い物ばかりでは、軟派の會員に滿足を與へられぬといふ説も有力で、別に坪内氏の提案に依つて、新群書類從十二册を編纂して文藝に關する卑近の書物を取入れることにした。

（以下略、傍点筆者）[12]

市島春城「顛末」の「発起の由来」によれば、彼が明治三八年（一九〇五）六月に今泉定介の提案を承けて国書刊行会（旧称：国書保存会）を立ち上げ、右に引用した「顛末」の「劈頭の問題」に見えるように、初期の評議員会にて取り上げたのは、いかなる書物を出版するか、という問題である[13]。そして出版物の候補として挙ったのが、塙保己一の『続群書類従』だった。しかし、既に経済雑誌社がこのシリーズの出版に着手していることを理由に、この提案は却下されたのである。経済雑誌社が『続群書類従』の刊行を開始したのは明治三五年（一九〇二）一一月である。この評議員会の席上には既に経済雑誌社が刊行中の『続群書類従』を入手した者もいた可能性がある。あるいは、国書刊行会から『続群書類従』を出版することを提案した人物は、評議員会結成の時点ですでに『続群書類従』の出版に向けて準備を進めていたであろう。

ところで、「顛末」の「首脳機関の成立」には、市村瓚次郎に始まり關根正直に至るまでの、「京阪に渉つて、圖書趣味を有する學者を略〻網羅した積りである」（「顛末」三頁）と春城が述べるところの三四名が列記されているが、刊行物の書目については、中核となる評議員で検討されたようである。「顛末」の「劈頭の問題」に見える評議員会については、春城の日記である『春城日誌』の明治三八年七月一二日の記録によって知ることができる。該当の部分を次に挙げよう。

一四

四時より国書刊行会委員（井上頼国[圀]、萩野由之、小杉榲邨、松井簡次[ママ]、幸田成行、坪内雄蔵）と上野精養軒[ニ]会し、同会に於て第一年[ニ]発行すべき書目を決定し、会則の修正をなして十時散会す[14]。

右の『春城日誌』の内容から、国書刊行会設立が企画された一ヶ月後、評議員が集まり、最初の年に出版する書籍の選定が行われているのだが、前掲の「顛末」と併せて考えれば、七月一二日の時点で既に『続群書類従』の刊行は断念された。それは同時に『梅花無尽蔵』が翻刻の対象から外れたことをも意味する。つまり早大本第三册に「中止ノ命ニ接し完了セス」の一文が記入されたのは、これ以降ということになるだろう。さて、当時参会の委員には注目すべき人物がいる。それは国語学者の松井簡治である。

松井簡治（一八六三～一九四五）、号は刀水、千葉県銚子の人。日本最初の近代的大型国語辞典とされる『大日本国語辞典』（上田万年と共著、冨山房・金港堂書籍、一九一五～一九一九年初版）の編纂者として知られる。帝国大学文科大学を卒業後、学習院、東京高等師範学校、東京文理科大学の教授を歴任したが、国語学・国文学のみならず漢文学も教授しており、漢詩文の創作も行っている。蒐書家としても知られ、その旧蔵書のうち六千部、一万六千五百册は静嘉堂文庫に収められている[15]。

第一節の書誌に述べたように、早大本の第二册と第三册には、「松井写」との署名が見られる。筆者は、この「松井」氏は松井簡治ではないかと考え、彼の毛筆による署名が見える資料を捜索したところ、管見の及ぶ範囲で次の三点を目睹した。

（イ）「松井簡治　写真と自筆署名」（『松井博士古稀祝賀記念誌』）[16]

（ロ）「松井先生筆蹟」（其一、其二）（『松井博士古稀記念論文集』）[17]

（ハ）「松井簡治書簡：国書刊行会宛」（早稲田大学図書館所蔵、請求記号：チ 06 04620 0029 0007）[18]

試みに松井簡治の手蹟と、「松井」氏筆写の早大本巻三と同巻六の写字をいくつか比較したところ、漢字のくずし具合がまちまちであり、似ているように見える字も散見するが、特定するには至らなかった。このように、確実な根拠

は乏しいのだが、国書刊行会と早大本の関係から、「松井」氏は松井簡治の可能性が高いと筆者は考えている。現在においてもそうであるが、七巻本の『梅花無尽蔵』は甚だ貴重な写本であり、どこにでもあるものではない。だが、明治三八年（一九〇五）、四三歳でありながら学習院教授の肩書きを持ち、気鋭の国語学者として知られた松井簡治であれば、何処からか『梅花無尽蔵』を借り出して筆写することは可能だったのではないか。

かりに早大本に見える「松井」氏が松井簡治であったならば、早大本が筆写され、後に早稲田大学図書館に購入されるに至った背景は次のようであるだろう。松井簡治は、国書刊行会から『梅花無尽蔵』を出版するつもりで、何処からか榊原本・鶚軒本系統の『梅花無尽蔵』七巻（未詳）を借りだして自ら写し、関係者にも筆写させていた。ところが、明治三八年七月一二日の国書刊行会評議員会の決定を承けて、筆写を中断せざるを得なくなった。中止の決定は下されたものの、散文を一篇も収めていなかったので後日を期して『梅花無尽蔵』巻六に収める二八篇を筆写し、原本は所有者に返却した。その後、同年十月に経済雑誌社から『梅花無尽蔵』が出版されたことにより、もはや無用の存在となったかに見える、未完成の『梅花無尽蔵』写本を、翌三九年十月一日に早稲田大学図書館に売却した。あるいは売却を慫慂したのは、国書刊行会理事であり、且つ早稲田大学図書館長、そして稀代の蒐書家であった市島春城であった可能性が考えられる[19]。

おわりに

早稲田大学図書館が所蔵する二種の『梅花無尽蔵』、早大本と黒川本は、玉村竹二氏の「解題」に取り上げられないことからも看取されるように、研究史においてその存在を等閑視されていた。しかし調べてみると、この両書はそれなりの由来を持ち、数奇な運命をたどって早稲田大学の所有となったことがわかった。ことに早大本については、太田道灌の末裔の蔵書に由来すると見られる榊原本・鶚軒本という善本と同系統のテキストに依りながら、経済雑誌社の『続群書類従』刊行という壮挙の裏に沈んだ不運な面もあった。かりに早大本が巻一から巻七まで完全に筆写されて国書刊行会から出版されていたならば、その後の『梅花無尽蔵』研究の発展にそれなりに寄与したのではないかと思われてならない。

最後に一点だけ、課題を述べておきたい。それは前節に挙げた早大本の「聖徳太子画像賛」（巻三上・258、挙例⑤）と「持是院屏風十二首」其六（巻三下・32、挙例⑦）には、なぜ他本にはない正確な韻字が見られるかということである。案ずるにそれは、巻三の部分を筆写した「松井」氏が早大本の親本に書き入れられていたであろう「〜乎」とする傍書を、間違いのないものとしてそのまま採用し、国書刊行会刊行の『梅花無尽蔵』の原稿として用いるために文字を改めたからではないか。「吹（次）和甫少年韻祝登科云」（巻三上・192、挙例④）の詩題の冒頭に見える「吹」字についても同様のことが考えられる。榊原本・鶚軒本では「吹」字が用いられ、「次乎」と傍書されてあるが、漢詩の唱和詩に次韻詩のジャンルがあることを「松井」氏が知っていれば、書き改めた可能性は極めて高い。

漢学の素養を有し、活字本の原稿を作成するほどの人物であれば、次韻詩の題に誤って記された「吹」字を「次」字に改め、漢詩の誤った韻字を正確な韻字に書き換えることに何の躊躇も覚えなかったはずである。そのようなことを考慮すれば、やはり「松井」氏は、漢文学にも通じ、その教授も行い得た松井簡治なのではないだろうか。博雅の示教を乞う。

【附記】本稿の執筆にあたり、早稲田大学図書館をはじめとする諸機関に多大なご協力を賜り、また早稲田大学図書館特別資料室の山田美季氏には、『早稲田大学図書館史』（早稲田大学図書館、一九九〇年）に記載されている早稲田大学図書館の諸文庫とその沿革、早稲田大学図書館所蔵の図書カード等について、懇切丁寧なご教示を賜りました。併せてここに感謝申し上げます。なお本研究は、JSPS科研費JP16K02369の助成を受けたものである。

注

1 坂本太郎『古典と歴史』（吉川弘文館、一九七二年）所収「和学講談所における編集出版事業」、石井英雄「『続群書類従』の完結」（『日本古書通信』第三四六号、日本古書通信社、一九七三年）、太田善麿「続群書類従の完結について」（『塙保己一論纂』上巻、温故学会、一九八六年）等を参照。

2 市木武雄『梅花無尽蔵注釈』第一巻～第四巻、続群書類従完成会、一九九三～一九九四年

3 国文学研究資料館電子資料館「蔵書印データベース」（左記）を参照。
http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/0033530.jpg?log=true&mid=35040&d=1505639165955

4 黒川真頼・真道の蔵書については、永田清一「黒川文庫」（『実践女子大学文学部紀要』第二三集、一九八一年）、柴田光彦「黒川文庫の変遷について」（『黒川文庫目録索引編』日本書誌学大系八六（二）、青裳堂書店、二〇〇一年）に詳しい。

5 柴田光彦『黒川文庫目録　本文編』日本書誌学大系八六（一）、青裳堂書店、二〇〇〇年）三六〇頁を参照。なお同書は、かつて一誠堂の酒井宇吉氏が所蔵し、後に実践女子大学が購入するところとなった目録を翻刻したものである。

6 本稿で取り上げる「続群書類従系」抄録本は、川瀬一馬『日本書誌学之研究』（大日本雄弁会講談社、一九四三年）所収「續群書類従の編纂」に説くところの「中書」本にあたる。これは板下書の準備段階として続群書類従本の巻次に従って書写し、且つ校勘したものである（同書一七八一頁）。なお、川瀬氏が「續群書類従の編纂」に「鉛版本は一面に於いて續群書類従の一異本を提供したものに過ぎず、塙編纂の原本とは自ら別なものであると言ひ得る」（一七八五頁）と述べるように、塙忠宝の編による『続群書類従』所収『梅花無尽蔵』と、経済雑誌社が初版を刊行し、続群書類従完成会が訂正版を刊行した活字本『続群書類従』所収『梅花無尽蔵』とは内容を異にする。

7 東京大学史料編纂所蔵『梅花無尽蔵』の調査にあたっては、東京大学史料編纂所ホームページ「所蔵史料目録データベース」（左記）を閲覧した。
http://www.wap.hi.u-tokyo.ac.jp/ships/shipscontroller

8 榊原芳野旧蔵本の調査にあたっては、国立国会図書館「デジタルコレクション」（http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2605444）を閲覧した。

9 「静勝」とは太田道灌の別号で、「静勝文庫」とは遠州掛川藩藩主太田氏の蔵書印である。国文学研究資料館電子資料館「蔵書印データベース」（左記）を参考した。
http://base1.nijl.ac.jp/~collectors_seal/
なお、国立国会図書館鶚軒文庫には、一冊本の『梅花無尽蔵』（抄録本）がある。これについて玉村竹二氏は「解題」に、「太田氏図書」と「静勝」の蔵書印が見えることを指摘し、鶚軒本と並んでこの抄録本を「室町時代以来の旧家太田氏の旧蔵」と推測している（「解題」一一七五頁）

10 水戸藩太田氏と掛川藩太田氏の祖については、前島康彦『太田氏の研究』（名著出版、一九七五年）「太田道灌」第八「太田氏の門葉」を参考した。

11 早稲田大学図書館　図書館史編集委員会編『早稲田大学図書館史―資料と写真で見る一〇〇年―』（早稲田大学図書館、一九九〇年）、二一頁および二四四頁を参照。

12 市島謙吉編集兼発行『国書刊行会出版目録・日本古刻書史』（一九〇九年）所収、「第一期刊行顛末」「劈頭の問題」（三頁）より引用。

13 春城日誌研究会編「市島謙吉（春城）年譜（稿）」（『早稲田大学図書館紀要』第五七号、二〇一〇年）によれば、市島春城が今泉定介と面談したのは明治三八年六月六日、最初の国書保存会の評議員会を開催したのは七月八日、ついで国書刊行会の評議員会を開催したのは七月一二日である。

14 春城の日記の引用文は、春城日誌研究会編「翻刻『春城日誌』（五）明治三十八年七月～一二月」（『早稲田大学図書館紀要』第三一号、一九八九年一二月、一九〇頁）による。

15 松井簡治の紹介にあたっては、「松井簡治博士年譜」（『松井博士古稀祝賀記念誌』、松井博士古稀祝賀会、一九三二年）、『松井簡治資料集』（松井簡治資料刊行会、二〇一四年）などを参考した。

16 前掲『松井博士古稀祝賀記念誌』所収。題は『松井簡治資料集』に従う。

17 『松井博士古稀記念論文集』、松井博士古稀祝賀会、一九三二年

18 同書簡は、早稲田大学図書館ホームページ、「古典籍総合データベース」（左記）にて公開されている。
http://archive.wul.waseda.ac.jp/kosho/chi06/chi06_04620/chi06_04620_0029/chi06_04620_0029_0007/chi06_04620_0029_0007_p0001.jpg

19 市島春城『随筆早稲田』（翰墨同好会、一九三五年）の「図書館の建設」「図書の蒐集」「思起す館長時代」（五〇～五四頁）に、春城の古書蒐集に対する熱意が述べられている。併せて参照されたい。